

會



報

1951年1月

153

日本山岳會

不如一見

松方三郎

インドではさぞヒマラヤの話でも澤山聞いて来たろうとお考えでしょうが、實はあんまり山の話は聞いて来ませんでした。

何しろ旅行の目的がまるで山と縁のないものでしたので、最初からあんまり期待はせずに出かけたのですが、向うに行つて見て本當に驚いたことは、ヒマラヤの御蔭元に来ていながら、ヒマラヤに興味を持つという人にほとんど會わなかつたことです。

近頃出た桑原君の「登山の文化史」を見ると、アルプスで顔の色の違つた人間を見たら日本人だと思つて間違いない、というようなことを書いていますね。ヨーロッパで山登りなんかをしている東洋人は日本人以外にはないということなんでしょう。

實は私も、多少はそんな話にのつて来る人もいようかと考え、時々、相手を見ては水を向けて見たのですが、大方は失敗でした。しまいに、直接法で、一體インドの人は何故こんなにヒマラヤについて無關心なのかと聞いても見たのです。

インドの連中は山登りなんかするのには貧乏すぎる。

というのが、私の得た回答でした。しかしインドほど大金持のいる國も世界に少いでしょう。ボンベイあたりの大財閥の總本家などに行つて見ると、ものすごい立派な建物に入つて、暑いからと上

衣なしで飛び込んで行つたりしたら、それこそ大恥をかくくらいに、部屋の中は、冷房設備が行きといてゐるのです。パリやロンドンの競馬シーゾンになると飛行機でヨーロッパに乗込んで行くマハラジャの話などを聞いて見ても、インドの人が貧乏だから山に興味を持たないのだという理窟はどうもたふさないようです。

宗教的にはいさゝか意味で尊重されていながら、その同じヒマラヤが山としては大して關心を持たれていないというところは、やはり印度の持つ文化の内容あるいは方向に何等かの關係があるのではないでしようか。

もつとも、餘り山などに登ろうと思わないからよいようなものゝ、萬一今日の大財閥、たとえばタタとかビルラとかいう大金持の御曹子などが、妙に山が好きになつて金にあかしてヒマラヤを荒し廻わされた日には、世のいわゆる山岳人は上つたりでしょう。そう考えれば今日のインドの人々があんまり山なんか、好きにならないう方が都合がいゝかも知れませんが。

とにかくそんなわけで、インド滞在一ヶ月の間に何十人何百人の人に會つたか知れませんが、私の接した範圍ではインドの人で、山やヒマラヤにわれ／＼と同じような關心を示した人は一人もいませんでした。ちやうど私のいる頃、ニュー・デリーの一新聞がアンナ・ブルナに登つたフランスの遠征の報告を續けてのせていましたが、こんなものが、果してどれ程読ま

れたものか大いに怪しいと思ひました。カシミールなども、こちらは大いに張切つて乗込んだのですが、本屋に列んでゐるのはクラウゼウィツであつたりチャーチルであつたり、耳にする話はパキスタンとの紛争問題ばかりといつたようになつて、その意味では少なからず失望しました。

インドはどこもそうでしたが、スリナガルなども、てんで地圖らしい地圖を賣つていないのです。サーヴェイ・オブ・インド・デヴィアの地圖は大都會やその附近のものには手に入るのですが、少し地方のものになるとまるで手に入らないのです。その上——これはカルカッタに来てはじめて知つたのですが——國境地帯の地圖は一切御法度で、それ以外のものでも、印度の地圖は國外搬出禁止と聞いて、全く驚きました。日本にもちよつと前には大分こころした時代がありましたね。だから、今日、獨立國になつて大いに國威を中外に宣揚しようとしているインドの氣持もわかるので、あなたが不思議とは思わないのですが、何にしてもしも不自由極まるものには相違ありません。ヒマラヤン・クラブのメンバーなども、この點では大いに弱つてゐるということでした。

もつとひとひ話も聞きました。今年カラコラムに入つた一つの隊は、カシミール問題をめぐつてのインドとパキスタンとの對立の結果、とうとう目的地に達し得ずに歸つて来たそうです。とにかくカシミールを西から北にとりまいてこの二の獨立國の兵隊が何百哩の

長い距離にわたつて相對してゐるのですから、山登りどころではありません。つい三年前までは一國であつたインドとパキスタンがこんな具合に鐵砲を向けにらめつことをしている状態は、よそから来た人間にはいくら説明をされてもなか／＼わかりません。

しかし兩國の軍隊がそのいわけを休戦ラインに沿つて一步も譲らぬとがんばつてゐることは事實なのです。だから若しギルギットやフンザ、チトラールに入るのならばパキスタンから行かなければならぬので、昔のようにスリナガルからでは問題にならないのです。そしてその休戦のラインは遠くカラコラムの山の眞中まで入つてゐるのですから、事實兵隊がゐるのかいないのかは知りませんがものものしい限りです。

中亞地方の旅行は前世紀のヤング・ハズバンドの時代の方がずつと樂だつたらうと、かつてラチモアがいつたことがありますが、そのラチモアの時代と比べて見て、今日の方がずつと難しくなつたことは事實でしょう。かなりの程度にこれと同じようなことが、ヒマラヤについてもいえるということです。わ／＼／＼からすれば、全く不幸事といわなければなりません。

まずこゝしばらくはガルワルの山でも登るんだねと、ヒマラヤン・クラブのBさんはいつてしましたが、事實そんなことなどしやう。ガルワルにしてもまだ相當大物もあるのですから、悲観するに

断 雲

伊藤秀五郎

遠き山 近き丘

夕陽に映えてうすむらさきに煙りたり

わがはかなき夢にも似たれ

断雲 二つ三つ

迷へるごとく浮びたり

この故里の瀟々山みち

草の色いまま變らね

行く人の絶えてあらねば

路くずれ掛橋また朽ちつ

旅人のわが肩に散る

名もしらぬ木の葉のかほり

かそけくもほほにかかりぬ

覺えにしつづら折みち

峠みち登りきたりて

はるかなる丘の彼方に

をさなごころなじめる山の



(佐藤久一朗作)

ドロミテの片影

日高信六郎

一九四三年のころ、ムソリーニの没落、バドリオ政府の出現、休戦條約の締結と、さかおとしに混亂のうちに落ちこんだイタリア政局の小康を待つあいだを、秋から翌年のはじめにかけて、東部ドロミテの山中コルチナ・ダンベツツオですごしたことがある。

コルチナというのは、南チロルの獨逸國境に近く源を發して、高峻な岩峯のあいだを、せまい溪谷となつて北から南に流れるボイテ川の兩岸に集う小さな村である。海拔は約千二百メートル、兩がわに天際をかざる山なみが、村の眞東と眞西にあつてくびれ込んでいるため、この谷の中では一番陽あたりがよく、比較的段丘や扇状地が發達して多少の平地と適度の斜面をつくり出し、ささやかな耕地と草原がひろがり、夏はうつくしい花野となつて避暑客をよこせば、冬はあらゆる傾斜の恰好なゲレンデをスキーヤーに提供する。オーストリア領時代からドロミテ登攀の拠点として知られていたが、第一次大戦の結果イタリア領となり、ムソリーニ時代になつてから、大へんな力こぶを入れて一流の避暑地且ウ

インタースポーツの中心にしたて上げたいくつかのホテルやケーブルカーやスキーリフトなどいろいろな設備をととのえて國際的のり出し、一九四一年にはここで國際スキー選手權大會が催され、日本人では菅原君が出場した。

私たちが行つた頃は、季節はずれであつたばかりでなく、戦争中のこととて、大小のホテルは獨逸の病院に徴發されてをり、各地からの疎開のほかにはお客もなく、山に登る人など見あたらず、召集にもれたガイドたちも手もちぶさたの有様であつた。

借りていた小さな別荘の二階で眼をさまし、カーテンをくつて見ると、眼の下にせまい谷をえぐつて流れる川の兩がわにならぶ人家をこえて、東の正面にはクリスタロ(三、二一六米)の巨岩をつみ上げたいかつい姿が、雪と氷の縞を帯び、ほんのりと紫紅色に映えてつき立ち、その左手の連峰は鋭い八峯のようなすどいデグザクを畫いて空をささげる。その前景をなす一連の峯は、きれいな常緑樹をのせ、大和繪のような繊細な景色を展開して、おもしろいコントラストをあらわす。クリスタロの右手は落ちこんでトレ・クロチ(三十字架)峠となり、旭日がそこから顔を出しかけてい

る。その右は巨大な岩塊の一つづき、ケーブルカーがその一角まで御客を引き上げる。その邊は絶好のスキー場になつてい

つた形のドームが根を張つてゐる。その頂きにヒヨッコのつかつてゐる岩峯はベツトリと白く、アルペングリューンが何とも云えず美しい。牧場のすみ立つて、暗くなつた谷の上にこの夕映えを眺めるのは、天國の一角をかいまみる一ときであつた。

西側の山を眺めるには、裏の草地に出なければならぬ。すぐうしろに間近くならび立つ三つの岩峯はトファナの一群で、最高峯は三、二〇三米、比較的やさしく登れる。この邊一帯は第一次大戦のとき、伊奥双方の山岳部隊が争奪戦を演じたところとて、今でも谷間の懸崖の高いところに砲門が開いていたり、實際の脊梁に鐵條網がのこつていたりする。トファナの西峯では、伊軍が山の中腹から頂上の眞下までずつと岩を掘りぬき、そこに爆薬をしかけて頂上を吹きとばした。今日そのトンネルを利用して登山が出来るのは珍らしい。このようにトレンカー出演の「火の山」を地で行つたこの邊のいくさは、ひとりひとり熟達した登攀の技術と大へんな勇氣とガンバリとを發揮した死闘であつたという。

この山の南のくびれがファルザレゴ峠(二、一〇五米)になつてをり、村からそこまで曲りくねつた自働車みちが通じ、さらにボルドイ峠を越えて、浦松さんや舟田さんが登られたローゼンガルテンやセラヤマルモラーダなどの山群のすばらしい岩場に導くのである。

峠の左には牛の背のようなメダオラオ(二、七〇五米)が横わる。その麓にあるチンクエ・トリ(五指峯)の奇峯は岩のぼりの道場として名高い。しかしこの方面の巔はクロダ・ダ・ラゴ(二、七〇九米)であ

暮れかかる姿望めば
あやしくもところは満れぬ

故里を去りて三十年

さまよへる旅路日をふり

あはれにも貧しく老いし
わがころそぞろ悲しめ
歩みはたしはしとまりぬ

風やみて鳥影立たず
寂として音さへなきを

草かげの石くれ一つ
破れ沓のさきに當れば

あなをかし行方もしらず
ころころとろげ落ちたり

そのむかしそこはかとなく

傷つけし幹はいまは

あざやかに跡を残せど

はかなきは若き日の夢

浮雲の消えさるごとく

消えゆきてまたとかへらず

る。海拔二千米近い同名の湖まで落葉松や
樺の林をぬけて登つて見ると、その西を限
る絶壁の上には、ならび立つ石筍のよう
に、又風雨に蝕ばれた古城の鐵塔のよう
に、グングンと仰ぎ見る人の視線を引きつ
けて、頸が痛いまでに、中空にのぼつて行
く力つよい線は、焼けただれたような赤黒
い岩峯のすがたを、澄みきつた秋の空にき
ざみつけている。

ドロミテの山はスイスアルプスなどは
まるでちがつた趣を呈する。石灰質の岩塊
は風蝕をうけて懸崖や絶壁を削りだし、あ
らゆる怪奇な形貌を示す。その登攀には特
殊の技能を要求するのであつて、ハーケン
やスカルベッティを用いる登攀術が發達し
たのは主としてこの地方からであるといふ
のもうなづかれる。他面高度は三千米を少
し越える程度で、大きな氷河を抱えるもの
はマルモラーダ（三、二四三米）ぐらいであ
り、里に近くて岩峯の下まで取りつきのに
手間がいらず、山にわけ登るといふよりは
純粹な岩のぼりの數時間に全精力を傾倒し
てスリルを満喫するのである。

だから来て見るまでは、全くわれわれに
なじみのうすい山かと思つていたのだが、
岩峯こそ怪異峻絶をきわめていたが、のど
かな牧場のかたの森の上にのしかかる峯
に氷河のきらめきは見え、割合に上の方
まで木が茂つてをり、思つた程のすざ味を
きかせない上に、谷川や森のすがたにうる
をいがあることなど、日本の山や谷になれ
たものにも存外親しみを感ぜさせるのであ
る。殊にこの邊の人たちは太古の民の風を
存してをり、日曜日のお寺まいりには、古

式のシルクハットを被つたり、黒ビロード
の服にレースをひらめかせる老爺老婆はも
ちろん、娘たちの色とりどりのきものも物
珍らしく、すれちがう人ごとにボンディ
（今日は）と交わすあいさつもほほえまし
いものであつた。

私たちが着いたのは九月末であつたが、
十月に入ると眼に見えて秋が深くなり、山
々にうすく新雪がかり始めるにつれて、
狭い山峽の高いところから段々に紅葉黄葉
と色づいて、日ごとに村に迫つて来る風情
はえも云われず、その間に暇を見ては、ソ
ラビスやクロダなどの山ふところに光る湖
をさぐつたり、峠を越え山小舎をたずねた
りあちこち歩きまわつていたが、一夜降り
だした雪がすつかり四邊を覆つて、冬にな
つて仕舞つた。

山村の冬は面白い。雪がつもると、小供
はもちろん大人までが何となくハシャイで
来る。いつも分別顔のとなりの奥さんが小
さな櫓につて、お尻で提をとりながら前
の坂道をすべり下りて行く。やはり多少氣
まりがわるいと思え、小さな子供を膝の上
にのせてニヤニヤ笑つてゐる。スキーがは
やり出す。家のうしろの斜面は近所の子供
の競演場になる。片足を高くあげてすべる
もの、しゃがんだ儘ですべるもの、ピョン
ピョン跳ねながら一足ごとに向きをかえて
すべるもの等々。ここは又上のゲレンデか
ら下りて来る人たちの通路にもなつて、せ
まい欄のきれ目をぬけて路に出るとたん直
角にまがる最後の試練場のところでは、巧
みなこなしで矢のようにすべつて行くのも
あれば、強引に下りて来てむこうの欄にぶ

つつかつたり、まわりすぎて路のまん中に
四つばいになるものもある。これは病院にい
る獨乙の兵隊さんに多い。

その頃になると、戦争の餘波はだんだん
こんな山の中にも及んで、南獨をめざす空
の要塞とそれを遠撃する獨戰機との果た
し合いが時々この上空で行われるようにな
つた。山のかたに落ちた米機の轟音がき
こえると、スキーをはいた獨兵や村の警備
員がとび出して行く。三千メートル近い山
の上に落下して、雪の中を村までたどりつ
いた元氣な獨兵もいた。

私のスキーの師匠はいゝ男で、本職は寫
眞屋さんだが、チューリッヒの音樂學校を
出てピアノをよくし、おまけに礦物や動植
物にくわしく、この邊の高山植物に關する
原色寫眞入りの著書さえある。氣候がよく
なつたら一緒にトファナあたりに登り、採
つた草花には學名をつけてくれる約束まで
したのだが、春になると山峽にはバルチ
ザンがはびこつて山歩きが危なくなつたば
かりでなく、私自身いそがしくなつて里に
下りて仕舞い、とうとう山らしい山に登る
ことが出来なかつたのは残りおしいことで
あつた。しかし朝に眼さめた床の中から氷
峯のモルゲンロートをながめ、夕に山を下
る牧羊の鈴音をきき、三千米の峻峯を仰い
で山野の逍遙にすごしたこの數ヶ月は、外
交官としては失業のどん底にあつたのだ
が、それは又じつに貧しい私の山歴におけ
る最も輝かしい豪華版の「ページ」であつ
た。

☆會報に原稿をお送り下さい☆



高田富士

(第二回 續き)

關根吉郎

極樂思想と云ふのは即ち淨土の思想であるから、本来ならば來世に棲む希望の世界であるべきだらうと思ふ。江戸時代ならば西方の彌陀の淨土思想が廣く流布されてゐたであらうが、そんな西方淨土などは誰も見て來た者はない。だから頼りにならないとは旺盛な懷疑思想だけども、藤四郎の見た極樂はそれではどんな種類のものであつたか。富士山は一番高い山であるから、その頂上に至れば最も天に近い、これ即ち天上に生きている心地がすると云つてゐる。又八合目で月の上るのを見てゐると、月の中に三尊の如來が現はれて、こんな尊いことは他に類例がないと云つてゐる。然しどれも瞬間の快樂に過ぎないのでないだらうか。我々が山に登つてゐても唯美しい景觀に心を奪はれるだけではない、一つの雰圍氣に酔ふことを経験する。その経験から汲み取つた心よい感激は後に残ることは事實であつても、何か物ごとに達したといつた、一つの終點に至つたと云ふ氣持とは、餘程かけ離

れたものだと思ふ。この短い快感を極樂などと云ふなら、こんな安っぽい極樂は他にあらまい。彼自身も、富士山上の極樂が本物の極樂ではないことは、十分承知してゐた。唯釋迦の説いた本物の極樂は遙か遠いところにあつて、凡人の求め得るところではないと、あつさり諦め、その代用品を富士山に求めたことを正直に彼の答に告白してゐる。どこ迄も本物を追究する精神に缺けてゐたことは残念であつた。簡單に求め得る極樂が本來の極樂のもつ功力を持つてゐないことは當然であつた。だから一度訪れた位では安心が出來ず、又來年も訪ねなければならなくなるのである。ところが富士山頂の極樂は一年に一度は行けると、その簡便さを寧ろ一つの特徴として讃へてゐる始末である。毎年義務のやうに行はなければ効力のないものなら、チフスの注射と變らない。この卑近さこそ、大衆に訴へる大きな力となつたのではないだらうか。考へればおかしいけれども、何も考へないのを常とする大衆には、極樂は西にも東にもなくて天井にある。その天井の極樂とこの世をつなぐ柱は一番高い富士山である。その富士山には毎年一度は出掛けられるし、實際富士山に登ればこれこそ極樂だと思はれる尊い目に遭ふと云ふ簡単な議論は、わかり易く魅力的であつたに異ない。

科學的教養の極めて乏しかつたらうと考へられる江戸時代庶民の、言論、行動に對して、科學的分析を試みることは、のれんに腕押し之感がないでもない。矛盾は到るところに見られるけれども一々氣にかけず、全體から得られる傾向を大切に把握したいと考へるのではあるが、能力が足らぬがための幸福感満足感と云ふものが、果して我々現代人の希ふものかどうかに就いては、一言觸れたのである。江戸時代の富士信仰者が駿河の富士山に出掛けるのは、その苦勞の點からいつて、現在の混雑列車の比ではなからう。又一年に一度と統制めいた言を吐くのも、登山はお山を開いてゐる夏の間だけしか出來なかつたためである。登山の技術はなく、白い薄い装束では雪の中を登るわけにはいかない。彼等にしても、若し條件が許すなら、年に一度とは決めたなかつたであらう。現在藤四郎健在なりせば、富士山のケイブルカーを反對したか、養成したかは、わからないけれども、年に一日以上極樂にあることが、罰當りだとは如何にも遠慮が深過ぎる。舊曆だから月のよい時を見はからつて出掛けたのであらうが、その名月も必ずしも見られたわけではあるまい。確率論的に考へても、確率が一でないことは當り前である。求める極樂に出遭はない場合に、自分の信心の不足だと疑ふことなく簡單に諦め得ることが、信仰の一つの勝利とも云へようが、信仰がなくても技術が進めば更によい場合に容易に遭遇することが出来るなら、むしろ滑溜でこそあれ好んで信仰に入る必要もないであらう。一日生きることを幸福と感ずる度合は瀕死の重病病人に及ばない

であらう。不足してゐるが故の幸福感、満足感というものは不健康の結果である。藤四郎などは體力や忍耐力などは大いに優れてゐたであらうが、不健康と思はれる點は思索の力であつた。

結局、卑近な對象と説明のし方は、ある程度の信者を集め得たことは確かである。然し乍ら更に多くの人々は、極樂などと云ふものをそれ程實利的にも、亦手近にも考へてゐなかつたのではなからうか。純然たる佛教の信者は勿論のこと、大衆と雖も今よりも佛教的な習慣は明瞭であつたらうと考へるから、極樂はやはり究極のもつと崇高なものであるとして考へられてゐた様に思へるのである。この點が藤四郎を奇人とみた大きな土臺であらう。もう一つはやはり富士登山そのものの問題である。現在でも富士山は一般には眺められる山として多くの價值をもつものであるが、富士の發達前の江戸時代なら、特に富士を眺めるによかつた江戸に於ては、富士は眺められる山であつた。現在考へられるよりも遙かに遠く存在であり、高い山であつた。現代の登山家と言はれる人の中にも、ヒマラヤの山と云ふと、やたらに高い恐ろしい山だと考へる人が決して少なくないのも同じ心理である。だから毎年ヒマラヤへ出掛ける人があたら一般大衆はやはり變つた人と稱するであらうと思ふ。文化の進展と共に登山の理解も進んだ今日でも、尙その可能性があるのであるから、安永、天明の昔に奇人とみられても不思議ではなく、死ぬ

迄に八十回やそこら、富士山に登つたことが後世遺書物の上に残されてゐることを現代人は不思議がるのである。(未完)

★圖書室よりの報告★

クラブルーム竣工は廿四年の三月十日だつた。二周年も間近い。來室者署名簿を繰つてみると、地方から上京された會員は別だが、在京會員でこのルームを訪れる諸兄の類は、大體きまつてゐるやうである。時間的餘裕がないのならばともかく、知つた類がないからと躊躇されてゐる會員が、若しあるならば、そんな遠慮めいたことは意味がないのである。時々顔を出してゐる内に、顔なじみも出來てくるのが、クラブのクラブたる所以であらう。山好きの集りである日本山岳會のルームに、知らない顔だとして、山の話の通じない人間がいる筈もないのだから、こゝを訪れる類は、もつと廣がつてゆくべきだと思ふのである。

ルームの中二階を、使ひ勝手によいものに改造すべく案を練つてゐるが、資金の點で行惱みの状態である。さらに會員諸君の支援を切望する次第である。(T・D)

圖書室基金寄附者芳名
 壹千圓 三枝守博 栗飯原健三
 二百圓 工藤弘
 百圓 藤野利夫
 小計 二千三百圓
 累計 二萬二千九百七拾圓
 支出 二千圓 テラス修理費
 八百圓 辻村遺稿外函代
 現在殘高 二萬百七拾圓

木暮理太郎氏を偲ぶ

昭和廿五年は木暮さんの七回忌で亡くなられた五月の小集會（第一二一回・五月十八日）を同氏を偲ぶ講演會としたことは既報の通りだが、同夜の講演の概要を記録に留めて木暮さんの思い出を記したい。司會者は神谷恭氏、講演者は田部重治、藤島敏男氏であった。

I 藤島 敏男

今夕は木暮さんを御存じのない人も多いのだが、戦争末期の九年五月、京都で私はその計報に接した。享年七十二歳、あとで書いたところによれば心臓の疾患であつたようだ。

木暮さんは日本の登山、ことに近代登山の父といふべき人である。明治以後の日本に於て、山登りに大きな影響を與えた人といえ、小島島水・木暮理太郎、このお二人が異なる意味で正に之に當るといえる。小島さんの場合は書物を通じて、木暮さんの場合は直接その人柄からにじみでる何物かによつて……といえるであらう。

さて、木暮さんはいかなる人物かといえば、人おの「見方もちがうこと」を思ふが、考古・歴史・自然科学にわゆる八宗兼學、それに體軀頑健、登山家としては申分なく、それでいて、一めん内氣でけつして自己をふりまわすということがなく、また他に自分を押し賣りもしなかつた。

田部さんの「日本アルプスと秩父巡禮」の序文で、木暮さん曰く「何の爲に山に登るか？ 山に登

るのはたゞ好きだからである……

……答はかんたんである……」と。これは木暮さんの山登りの考え方をもつともよく表わしている。いろいろな角度から考えて、心から山を愛し山に登るといふ點では稀に見る人である。山を好む人にも、探險家的、旅行家的その他いろいろの傾向がある。またたゞ登るだけ、という人もある。登山者各々の三つの軽重こそあれ兼ね備えているはずだ。日本の近代登山の初期には探險家的登山者が多く、山がしだい判つてきてからは登攀的になつてきた。

木暮さんは初は旅行家的、ついで探險的傾向になつたようであるが、一方登攀家でもあつた。十三歳で富士に登つてから六十過ぎまでうまずたやまず山行をつづけ、その登山家としての生命は日本人としては最長といつても過言ではない。だが著書は『山の憶ひ出』上下だけで、それも六十四、五ではじめて著書を世に問うたのである、尤も雑誌や會報などにはたくさん執筆されてはいるが。

『山の憶ひ出』は上下一千頁に及ぶが考證的なものが多い。「利根水源地の山々」など正に代表的なものであらう。一方「奥秩父の山

旅日記」は山岳文學としても讀みごたえのあるものである。東北やその他文獻として發表されたいものにいたつては、もう知るに由もない。

日本の登山の先驅者としての功績は、秩父・上州・信州あたりにあると思う。山岳會の設立後、九年もたつてから入會したといふことも、一見ふしぎなようではあるが、ひとえに地味な人柄によることであらう。入會以來は會のため、に獻身的な努力をされた。昭和十二年に會長に就任され、十九年逝去にいたるまで、渝らざる奮闘をつづけられた。

大正四、五年の頃、私はこの大先輩と親しくする機會を得て、そのすゝめによつて日本山岳會に入つたのである。そして木暮さんと二度山行をともした。その一つは利根水源紀行で、二人で人夫を三人伴ひ、當時すでに五十餘歳で相當の荷を負ひ約十日の山行をつづけた。平ヶ岳頂上では非常な喜ばれ、私がいろいろ細かい質問をして叱られた。せつかくの喜を小うるさい質問でめぢや／＼にされた、というわけらしい。

大正十一年、寫眞を本格的にはじめられた。何しろ非常なこり性のことゝすいぶん上達されたが、その間の逸話ともいふべき有名な傳説がある。「まずフィルムを二どあけて見て、それから仕掛けて寫したら寫つていなかつたのはおかしい」とか、いま一つは「人の器械を借りてT(タイム)を押したそのまゝ持ち歩いて、氣がついたらやはりあいていたのには驚いた」とか。たゞし眞偽の程は保證の限りではない。

私は學校時代以來、この大先輩の指導を限りなく受けたのであつた。

II 田部 重治

私の話は少し長くなるから前以てお断りしておく。木暮君との同行の長い山行は約廿回、一日二日の山行は何百回にも互つてゐる。

君をはじめ知つたのは明治廿八年。たしか焼打事件のあつたときで、私は上京して大久保の東條大將の家の向いに宿をとつた。ついで牛込に移つたが、ちやうどそれが新潮社のうしろだつたので新潮社へ遊びに行つた。當時田舎文士を以て自認し、つねに投書をつづけていた原稿の送り先がこの社であつたこと判つてびっくりしたのである。さてその社長の紹介で高須芳次郎の所へ行つた。その高須が、私のアルバイト先としてさらに木暮君を紹介してくれた。ざつとこのうへ経路である。當時葉がき文學というものがあつて、君がその事務端をやつていたのである。木暮君の宿は神社のうしろの紅葉館といふ、君はいつたつて無愛想で、初対面を濟せたにもかゝらず、そののち、なるべく私をさけてゐるような感じを與えた。だがいつしかだん／＼話をするようになった。交際があとほど終りほどよくなる人であつた。いつも机上に女性の小さな寫眞があるのも何か奇異の感にとらわれたが、ほかならぬ後年の夫人その人のものであつた。

君の室で會う人は、太田三郎（畫家）君、それに君の従弟の二人であつた。面白いことに木暮君はけつして下宿を變えない人であつた。かえつて下宿のおやじが三度も變つて、何でも木暮君に相談にやつてきた。客の待遇、宿の傳統慣習など一々教示を受けにくるという始末だつた。

君とはよく繪の話をした。といふのは、大たい葉がき文學というのが、そのような雑誌だつたからである。三年たつてはじめて山の話をした。まず私が木暮君と同じ下宿を入つた。あるとき何かのはずみで、ふと、山の話がでたので、私の語學の師である林並木先生（現在も日本山岳會員）の話をした。また先生の山行の話もでた。ついに山へ同行することを約束するにいたつたが、そのトレーニングといふものが大變なものだつた。毎日市中や郊外を朝から夜まであそびまわつた。流山と戸田の間を、越ヶ谷を通つたこと、西新井大師のそばに鯉を喰はせる家があつたことなど印象にのこつてゐる。

君はとくに歴史に長じていたが、その原因の一つは記憶力の旺盛にあるのだと思ふ。江戸川へ行つたときのこと、馬琴の文章で、犬飼見八のくだりなど、二枚くらいまる暗記で語つてくれた。草でも天文でも精通していた。

君が東大を中退した理由、これは判らない。ともかく非常ななにかみ屋で、一めん私が木暮君を世にひつぱりだしたといつてもいい。

だろう。

明治四十一年、高尾山えゆき、

來年は一つ、こゝから雲取山まで歩こうという約束をして喜んだことをおぼえている。翌四十二年五月、大鍋ぎやて和服ででかけた。あの尾根はとき／＼萱所もあつたし、三頭の手前で大夕立にもあつた。そのとき三頭を獲見したというわけだ。甲州側へ下り川野へぬけて雲取え登つた。これが第一回。

ついで第二回は秋、熊谷から渡久礼え歩き、そこからついに信州まで行つた。私も教師のことゝて、餘り日子が自由にならないから、時間節約の爲に徹夜で強行した。波久礼で夜の九時、秩父大宮が午前の二時であつた。私は呼吸器が悪く肝油を携へた。さらに荒川が十時、そして午後三時いよいよ栃本へつた。その夜は小夜具一枚だつた。翌日十文字峠えゆき、三寶山を往復して梓山え下り、川端下から金峯山をこして黒平へでた。その前、明治廿八年に君が一どきことがあつたのだが、二人は道を迷ひ一ど金峯まで戻つて出直して黒平えつた。

當時私がまだ日本山岳會の會員でなかつたが、會の先輩辻本（工學博士辻本満丸氏）さんを崇拜して、難同ヶ谷の辻本邸を訪ねたところ、辻本さんは折しも食事であつたにもかゝらず歓迎され、爾來温い先輩となつた。そのうち中村・高野・小島・三枝・辻村を會わすからといわれて、私が木暮君をつれて辻本邸へ行つた。そこで木暮君が皆と知りあい、さ

きにも斷つたように、稀代のはにかみ屋が世えてたわけである。

君は元來非常に潔癖で、みかんをたべても、いち／＼手を洗つた。朝に必ず顔をそる。あの有名な無精ひげはじつは結婚後のことに屬するのだからおもしろい。また、毎日水浴した。それがどうこうというのでもあるまいが、宿えは毎月茶代を餘計拂つた。

蓬來町で世帯をもつてからがぜん無精になつた。君と私の山行ではどちらの夜は眠らない。はじめの秩父縦走では、雁坂の一杯水でメリヤスシャツ一枚になつて、夜、焚火して暑い／＼といつて扇子をつかつた。君は野球が一ばん得意で、ボート、柔道その他スポーツならなんでもよくして可ならざるはなかつた。嚴父は剣道の達人で八十歳以上まで長命された。山行の記録をしなかつたのは秩父縦走で、明治四五年七月廿日すぎのことゝて明治天皇御不例中の遠慮によるのかとも想像する。

その山行のときのこと、赤志から雁坂峠えかけてゆくとき、まゆ商人が杖の先にまむしをかけてきて、その人に泊る場所をたずねたら一杯水を教へた。そのまた一杯水へつて見たところが、白衣の行者が一本歯の足駄をはいてきてすてに寝入つていた。それから甲武信岳へ行つたが、水がないときいていたので、川浦から石油かんに水一升入れてぶらさけていつた。私はその先年中村君と大菩薩え行き死にそこねたので、以來すつかり用意周到になつていたのであつた。

雁坂から甲武信まで二日の豫定が、その日の午後三時頃ついでしまつて、ちがつたと思つてびつくりした。梓川え晩の八時について翌日二人は別れ、私が君に山の注意を與えた。君は「田部に説法されて悲しくなつた」とあとで人に語つたそうだが、さて別れてから、私は八ヶ岳え、君は中津川え行つた。君はそれから御岳・上河内・平湯・神通川・富山えと歩きつゞけた。記録しない山行には金峯行であつた。君にとつては何回目かもあつたからだろう。東北大の土井教授とも川端下・金峯の山行があつた。私との同行はやはり秩父行が一番多い。

いつしかだん／＼君と一しよに山え行かなくなつたのは、私には山登りよりも夏休に勉強しなければならなくなつたのが主な原因で、ついに黒部や上越えゆかずじまになつた。秩父え行つた頃は世上まだ秩父をしらず、小島君にしてその例にもれなかつた。中村（清太郎氏）・梅澤（親光氏）・武田（現會長）と私を加えた四人で秩父會なるものを作つた。そもそも梅澤君が「武田」という皮肉屋がいるから、會わしてやる／＼といつて、目のあやめで會合し、こゝに武田・木暮の初對面の段取となつたのであるが、忘れめせぬ大正何年、武田君が英國から歸つたときのことだつた。

いろいろなことが前後の順序もなくとびだが、大洞山と雲取山の間に三千尺ほど落ちていると私達は考へていた。その頃、明治四十

五年、中村君と私が青梅から小河内へ行つて泊つた晩、隣の部屋の客が藝者をあけてさわぐので、がまんがならず物干え上つた。その客は小林區署の役人でふと話をしたら、雁坂と雲取間に二千米の山があることをきき、二人はとびあがるほど喜んだ。その十一月――夏は木暮君一人行つた――唐松尾え登つた。なんでも一之瀬から七千尺の登りで百回休まねばならんといふことだつた。その山行は中村・木暮兩君に私の顔ぶれで、鹽山から石切場へ行く途中夜が明けて奥山の姿を遠望した兩君が大音をあけて叫んだ。三之瀬・唐松尾・將監峠のコースで行き、大洞川の源流の笹場に徑三尺ぐらいの井戸があり小屋もあつた。

私が酒一本袂の中え入れてゆき木暮君はあまり飲まず、中村君と私はよくのんだ。雲取え行つたら、中村君は口中つばがなくて御飯が食べられないといつて、二人で助けつゝ、白岩を通り、谷に火が見え、そして人聲がする。たずねあてると炭焼小屋だつた。來客中であつたが狭いので私たち三人と入れ代りに客は辭去した。水を乞うたら、桶を背にして吸みに行つた。なにしろ海拔五千尺以上の高處だから。

藤島君が、先刻よく木暮君の性格を語られたが、小島・木暮兩君を比較して、二人とも大先輩の一語につきる。だがいま一人、林並木先生は大々先輩であるが地方にいられたのであまり知る人はないようである。

小島君は論客的、詩人的登山家

木暮君は歴史家、考證家、實踐家的登山家であつた。木暮君は晩年短歌に親しんだ。なお、君が「狐に神秘的である」と、晩年まで云つていたのは、いま考えなおもしろい。君と平地旅行の記憶はほとんどない。やはり君と荒川谷を下つたのが一ばん怖しかつた。この谷の木賊瀑は、日本一流の瀑といつていゝものだ。その瀑えきた頃、飯はとうに喰つてしまつていた。瀑から五丁ほど下つていゝ道であつた。それから栃本までいゝぞ君の姿を見なかつた。なぜそんないそいだものかふしぎに思つていたが、その理由がたゞ風呂えはいりたい一心だつたとは、後日の述懐である。この山行がもつとも困難だつた。

また、これこそつとも困難と覺悟して行つた、笛吹川から梓山ごえは案外かんたんで、ずいぶんごもそうもあつて豪遊したものだった。木暮君との山の思い出、君との交遊は語ればつきるときがない。

（以上は、田部・藤島兩氏の講演を私が筆記したもので、もとより速記でもないから脱漏や誤謬もあることゝ思うし、兩氏の話の持味や調子がほとんど没却されたのは残念であるが、大要を傳へれば幸である。原全教記）

本年度の會費未納の方は至急お納め下さい

★年 額 三〇〇円
★東京支部員は 五〇〇円

國體紀念

富士登山報告

十一月二日—六日

於富士山、御殿場口及富士宮口

(御殿場口) リーダー、堀田山

越智 野田 福岡 廣羽 桑

原 小野田 野澤 齋藤 醫療班

桶口

參加者 愛媛縣六名 岐阜縣六

名 石川縣五名 北海道五名 岩

手縣五名 千葉縣一名

(富士宮口) リーダー、舟橋 村

木 辰沼 金子 兒島 清水 飯

島 伊勢本 醫療班 小野 石川縣五

名 靜岡縣二名 群馬縣一名

尚靜岡支部より御殿場口には鹽

田 山本 富士宮口には 磯野

太田が庶務掛として参加。

靜岡縣と本會との共催で今春以

來の懸案であつたこの計畫は、靜

岡縣の豫算が判り決りなかつた

爲、何時迄も愚圖々々してゐて

つかり準備が遅れてしまつた。十

月中旬、やつと要項を發送し終る

と今度は参加者が來て呉れるか何

うか、十一月初旬の富士に雪があ

るか何うか、色々な心配が私達の

胸裏を離れなかつた。元來この催

は、靜岡支部が庶務全般を受持

ち、本部は技術のみを擔當する

約束になつてゐたが、準備期間が

短い爲萬全の態勢と云ふ譯には行

かず参加者も豫定の半分五十名程

度であつたが、十一月二日には豫

定通り靜岡縣廳の前で入山式を舉

げる事が出来た。

日程及コース

二日 十二時四十分入山式

三日

A班 御殿場旅館泊

B班 富士宮旅館泊

C班 御殿場(自動車)一

太田坊 御殿場五合目

B班 富士宮(自動車)一

富士宮二合目—富士宮五

合目

四日

A班 御殿場五合—頂上

B班 富士宮五合小屋—

頂上往復、山梨縣五合頂

上にて幕營

五日

寶永山噴火口にてA B班

集合、技術講習は中止、

太郎坊(泊)

六日

A B班 太郎坊—御殿場

閉會式

天候、積雪状態共に恵まれたも

のとは云へなかつたが、比較的小

人数で皆若者ばかりであつた爲

か、和氣霽々、活潑な山行であつ

た。三日は御殿場、富士宮共に曇

天で、降つたり止んだりする氷雨

の中を五合目迄登る。砂礫の道を

だら／＼と登る御殿場口に比して

苦むした森林帯の富士宮口は距離

も短く仲々感じがよい。

四日、A B班とも夫々六時半五

合目出發。ガスが捲き、雪がちら

つてゐたが登るにつれて薄日が

さして來た。雪は六合目附近から

現はれたが薄化粧程度でアイゼン

の必要もない。九合目でアイゼン

を着け、十一時半頂上着、A B班

班共に銀明水に集合して時ならぬ

賑ひを呈してしまつた。午前中の

曇天もすつかり晴れ上つて十五米

の風もそよ風の如く殆ど氣になら

ない。銀明水の前に山梨縣の人達

が張つた天幕を觀測所を見學して

二時下山。薄紫色にかすんだ寶永

の火口を眺め乍らのんびり下りて

來ると、今朝の雪は七合目迄すつ

かり解けてしまつてゐる。

五日、昨夜来の雨も、朝になる

とすつかり晴れて、伊豆の山、箱

根の山が美しい。B班は七時半富

士宮五合出發、御中道を経て寶永

の上でA班に合する。夜來の雨で

雪がすつかりとけてしまつたので

技術講習を中止し、火口縁に坐つ

た一行は日なたばつことを楽しみ

ながら愉快に駄辯つて二時間許りを過

す。曰く何々講習會、曰く何々記

念登山等と云ふ物々しい催には珍

しいのどかな風景であつた。

この日はA B班共に御殿場五合

に宿泊の豫定であつたが小舎が狭

く設備が悪いので全員太郎坊に下

る。夜は主な豫定を終へた氣易さ

から焚火を圍んで歌の會、各縣お

國自慢の歌を出したり可愛い高校

生が調子外れの聲を出したり楽し

い時間を過す内にすつかり夜霧に

濡れてしまつたので、再び屋内に

入つて堀田理事を圍んで座談會が

行はれた。

六日、再び小雨、自動車で御殿

場へ歸り、淺間神社で閉會式舉行

靜岡より大室支部長、栗野體育課

長等が參會され、技術部の講評が

あつて無事散會した。

今回は積雪も少く講習會として

は殆ど見る可きものはなかつたが

始めて顔を合せた様な人々が相集

つて何の事故もなく登山を終へた

事は、矢張り仲々大變な事である。

殊に東京から參加したリーダーは

堀田、辰沼兩理事の他は何れも卅

歳前の若い者ばかりであり、地方

から參加した人々も、新制高校の

生徒、或ひは同じ様な若い人達許

りで、お互の若さの中に何か通じ

合ふものを感じさせる様な張切つ

た容顏の内に、やる事はつたな

かつたが夫を補つて餘りある様な

氣がする愉快な山行であつた。

學校出の若い登山者と地方の若

い登山者がお互に理解し合ふ機曾

を少しでも持ち得たと云ふ意味で

此の富士登山は決して無駄ではな

かつた様だ。

尚行事とは關係がないが閉會式

後、大室支部長、堀田理事以下リ

ーダー全員が御殿場の名譽會員秩

父宮殿下の御殿—御挨拶に參上し

た。登山姿の薄きたない者が大勢

押しかけたのは宮家としても恐ら

く始めての事であつたらうが、殿

下の潤達な御氣象に我々も至極氣

樂に構へて各學校山岳部の近況、

富士山の事等を一時間餘も色々御

話し申上げた事を附記する。

(村木庸益記)

第五回國民體育大會
登山部門(鈴鹿連峰)
報告

昭和廿五年十月廿八日名古屋市中

瑞穂競技場に於ける國體入場式終

了後全國から參集した役員選手一

同は鈴鹿の湯山温泉に集結、同日

五時半から入山式が行はれ、大會

々長、三重縣知事、三重山岳連盟

會長等の挨拶があつた。翌廿九日

は前日に劣らぬ快晴各縣選手は左

の三コースに分れて出發した。

A班 湯山—千種—流谷—釋迦岳

—神崎發電所(泊)—愛知川洞行

—天狗瀧—羽鳥峰—朝明ヒュッ

テ(泊)—根平峠—御座所岳—武

平峠—温泉

B班 湯山—千種—朝明ヒュッテ

濱野正男。

(泊) 愛知川—水晶谷幕營地

(泊) 杉峠—雨乞峠—御座所岳

—温泉

C班 湯山—田光—水見小舎幕

營地(泊)—愛知川—水晶谷幕營

地(泊)—國見岳—御座所岳(藤

内壁岩登)—温泉

廿九日は秋日和で各班共秋色を満

喫したが廿日廿一日は時々雨にた

られてC班は岩登を中止し他に

も若干コースを變更したが、全體

としては事故なく成功であつた。

廿一日晝には全員が湯山に歸着し

午後は藤島、關根兩氏の講演があ

り、翌十一月一日山を下つて四日

市市公會堂で閉會式が行はれ、大

會々長、知事其他の挨拶に引續き

チーフ・インスペクター濱野正男

氏から講評があつて行事を終了し

た。

今回は川喜田壯太郎氏をはじめ

三重山岳連盟の諸氏が準備萬端を

行はれ、また名古屋山岳連盟の諸

氏が十分の協力を示され成功裡に

行事を遂行せしめたことに對し會

は深甚の感謝を捧げたものであ

る。また本行事に岩登採用決定以

來多大の努力を惜しまれなかつた

石岡繁雄氏に對しても敬意を表す

る。天候のため岩登は實施に至ら

なかつたが同氏等の努力は決して

無駄にはならなかつたと思ふ。

尚本會から直接委嘱したインス

ペクターを心より引受けられた各

支部の十五氏に對しても深く感謝

する次第である。

本部よりの参加役員—藤島敏

男、入澤文明、藤井連平、關根吉

郎、望月達夫、村山雅美、鈴木正

俊、(チーフ・インスペクター)

濱野正男。

名譽會員招待晩さん會

日本の登山界に嘗つて一つの時代を作り、われわれ後進者に大きな影響を與へられた名譽會員の方々を招いて、久振りにその風貌に接し、話もきかう。そんな意味でこの晩さん會をひらいた。十一月廿四日神田YMCAの會場に集る者五十八人。高野、田部、中村、三枝、島山、加賀、横七人の名譽會員が出席され、諸氏からそれぞれ意義深い感想が述べられ、吾々は好き先輩を持つことの幸福を想つたのであつた。食事が済つて、ほど近いクラブルームに席を移し、こゝへ參會された武田會長も交へて一同談話に時の移るのを忘れた。



名譽會員 高頭仁兵衛氏肖像

〔越後支部で彌彦山頂に建設したものの會報 151 號既報〕

廿三日はクラブルームで戦後初めて有志晩さん會を催し、それから丁度一年で今次の集りであつた。或はこれが恒例のアニヴァ・デイナリになつてもよいであらう。廿六年度は誰が世話人を相勤めるか？ 名譽會員の方々も、會員の諸兄も、出席をたのしみに待たれるやうな晩さん會が催されることを望んでやまない。(T.F.)

(出席者) 武田久吉 高野鷹藏 三枝守博 島山梯成 田部重治 加賀正太郎 中村清太郎 横有恒 (以上名譽會員) 吉田竹志 加藤泰安 海野治良 米澤益二郎 須川浩 藤井連平 沼倉寛二郎 網倉志朗 百瀬舜太郎 長富修吉 相内武千雄 村山雅美 今村正二 野口末延 初見一雄 逸見眞雄 日高信六郎 堀田彌一 渡邊公平 石原廣 早川種三 山田力 林和夫 松方三郎 小原勝郎 伊藤年牧野衛 田邊主計 成瀬岩雄 織内信彦 佐藤テル 藤島敏男 森時子 佐藤久一朗 岡茂雄 瀬川

圖書紹介

山と探検

今西錦司著 廿五年十一月
岡 書院刊 百八十圓

著者が昭和十五年の「山岳省察」(弘文堂刊)以後筆をとつたものをまとめて世におくる第二著である。

未知未踏の境地に憧れるといふ點で、登山と探検とは共通なものがあつて山へ登る者で探検に興味を持つものは少くないのだが、著者は吾々の仲間では探検の分野に目立つた業績を挙げた一人である。

ヒマラヤ遠征を志して成らず、轉じて蒙古に大興安嶺に、たとへ山らしい山はなくとも大陸の茫漠とした廣がり、心ゆくまで堪能してきた印象は、本書の内に回想風に著者の一種の風格ある筆致で巧みに描かれてゐる。

書中の諸篇について繰返すよりも著者の「世界の、この大きな動搖の與へた影響が、深刻であれ浅薄であれ、いままで十年間に書き綴つたものなから、汲みとれるとしたら、たとえ初登攀のかがやかし記録はなくとも、この時代に生きた一人のマウンテニアの、生活史の記録として、意義があるやうに思はれる」といふ言

葉を引いておかう。

桑原武夫著 廿五年十一月
岡 書院刊 百六十圓

十九年四月「回想の山山」といふ題名で刊行されたものに多少の増補をして再刊されたのが本書である。當時會報誌上(一三二號)に聊か批評を試みたのでこゝに繰返す要もないが、巻頭の「登山の文化史」は吾國で他にこれに匹敵する文獻がなく、登山者は一度は讀んでおいてよいものである。

「近ごろ若い登山者たちに會つて驚くことは、登山の歴史的知識の不足むしろ空白といふことである。中略……もとより登山においてまづ登らねばきは登高行爲ではあるが、過去の偉大な先驅者たちの苦しみみちた行爲を知ることなくしては、自らの未來の登高を支へる理想の深められることはありえぬのである」と著者は言つてゐるが、そんな意味からもこの本は讀まれてよい。(以上二項 藤島敏男)

トルコの山の本

Cilo Daglari
(Les Monts Djillo)
Istanbul 1949—Mili
Egitim Basimevi 發行

本書は略々B5型、本文アト紙三十二頁、表紙厚紙、内容は殆ど寫眞版で盛られ、本文はトルコ語とそれを佛譯した同文と地圖二面といふあつさりしたものである。併し私達はアルプスとかヒマラヤの寫眞には親しく接する機

會もあるが、トルコの山を見せてくれると云う點で楽しいものである。

その對象となつた山はジロ山塊で主峰レシュコ・グリアン山(四一七〇米)以下四千五百米以上三百米級である。内容は正業を別に持つ人々の集りであるトルコ山居會のジロ山塊の探險報告なのである。

一九四一年八月に初められた會の目的はハカリア地帯についての研究、特にエルヂエ、アラダとジロ山塊についてであつた。そしてその地方への探險は主として夏季に限られてゐた。一九四一年にはエルヂエ區のボルカル山系へ一九四五年はニイディ區のアラダ山系へ、一九四五年と四八年にはこの書の題名であるジロ山塊に向つてゐるのである。そしてこの結果ジロ山塊の五萬分の一圖幅が作成され、トルコ體育廳指導の下に「我々の山」が出版されたこと、そしてこの會はインスブルク大學教授のハンス・ボベック博士の指揮の下にあること等を記してゐる。

寫眞は全部で三十一面あり、レシュコ・グリアン山頂に隊員が國旗をたてゐるもの、氷河の数カット、案内人の顔など中々たのしめるものがある。尙末文にジロ山塊についての文獻が掲げられてゐるからノートしよう。

一「パン及びビトリリス兩郡統計表(ロシア文) 一九一四年陸軍省印刷局印刷、この書はパン、ビトリリス及びハカリア地方に住む行政官のためにロシアの一官

更が上記の地帯について調査したものである。

二、中央クルヂスタン地方高山研究(ドイツ文)一九三八年、ハンス・ボベック博士著、ベルリン發行、地圖五葉及び本文中に挿入八葉。

三、ダクテリミツ(我々の山)(トルコ文)一九四八年、ムパファーク・ウヤニク著。

四、中央クルヂスタン(ドイツ文)一九三七年、ハンス・ボベック博士著(ドイツ山岳會々誌より特別印刷)。

五、中央クルヂスタン地方高山の現状と氷河の比較(ドイツ文)一九三九年、地圖二葉附。

とにかくこの書はトルコにジロ山塊と云う高山があつて、それは云んな姿をした山々があるのだと云ふことを外國に示したものであることがうなづかれる。(小野幸)



會員通信

スウイスからロンドンへ

水野祥太郎

出發にあつて大變御厄介をかきました。何分はじめての旅、し

かも空の経験者は少いので敬へてくれる人も少くすこしあわてゝいたようにですが、どうやら英國にもたじろで來ました。今、ハロゲイト(避暑地の)の宿で寒さにつるえながらこれを書いていきます。

佛印にもタイにもビルマにも印度にも、五六千米の上から見て前後左右見わたす限りの大平原が、世の中には随分とあるものだ、つくづく感心しました。歐洲へ着く迄高山は臺灣の東沖から入道雲のわき立つ新高山群を見たのがたゞひとつ。ガンヂスの河口の美しさ、インダスのものすごい泥のひろがり、インダス近くの廣い砂丘の連りは見ましたが、ヒマラヤは遠すぎて片鱗も見えませんでした。アラビア半島の突角で飛行機からすれば(と見たのは僻目に違ひありません)の山を見たのが山らしはじめてのもの。ローマで一晩おくつてスウイス行の飛行機を捉え、ニースの沖でぐつと下りる目の先に眞白い山がキラキラ光っています。ニースの海岸では陽除けの傘がテーブルの上にかぶさつてゐる陽氣です。丘を縫うドライヴウェイと赤い屋根のニースの上をグルリとまわつて高度をとると、目の前にドフイネが段々と視角を變えながら出て來ます。眞白くキラキラしてゐるのは新雪がすつぽりと山をつんでゐるからでした(九月二十九日)。やがて全容が出てメイジユの特徴のある山稜が眞正面に見え、南にエクランが肩をいからせています。グルノーブルからこちへ入る谷でしようか、人家の少ない寒そうな谷を次々と飛

び越して行きます。エクランの斷崖は随分大きいと思つて感心して眺めていました。山波がつゞいて中には手のとぎえそうな山頂に新雪が斑にもつています。

やがて右前方にモンブランの廣い頭をもつた山群が視野に入つて來ます。山容は乗鞍をグツと上の方へ盛り上げた位かなと思つてゐるとどんだんメーメル・ド・グラーヌの奥が見えて來ました。ドリユールやグランド・ジョラスがはるかに指さされます。ずつと東と南よりに遠い白い峯が光つてゐます。ペニンとベルナールの續きだろうと位より残念な判りません。見まわしてゐる間に谷がやわらかい縁になり、湖が見え出しグンゲンと下げ船です。國連の建物が美しく見えるのを一周してジュネバ東南の飛行場に下りて了いました。

ジュネバは既に深い秋。ローマと比べて随分涼しい。いや寒い。翌日街へ出てまづ買ったのがスウエターです。曇り日で夜なぐストロブが欲しい。運動具屋へ行くと變つたカラビニャが二三ある。キャンピングの道具は随分多いようです。それよりも百貨店に色々山登りの道具があるのはさすがスウイスです。ジュネバという處はスウイスでも山に縁の少い所ですが、ハーケン、カラビニャ、ザイルが色々出てゐる。店員に英語とドイツ語をしゃべるのがいて三日前までドロミテンで山登りをやつて來たと戦績を語つていたが、残念ながらこの山の名は判らなかつた。イタリー名なのでデタラメに南の方だなという、大いに敬意を表してくれて見直したと

いう顔で、どこの國かと訊く。マールセル・クルツもヘル・マキも知らない男なので大したもではなからうと決めておく。たゞしこれが新しいジュネレイションなのかも知れないと思う。

スウイス到着がおくれたので仕事でロンドンで待つており、三日でジュネバを去つたが來年再訪できるよう手はずは頼んでおきました。ロンドンに二週間、アルバイクラブのある南オールドク街は時々通り、とくにすぐ近くにインド料理屋があつてやすくメシを食わせます。今居るチェルシーの近所に古本屋があつて「スクランブルス」は三、四巻(二冊もあり一つは八七一年版)です。スマイスのものが澤山並んでゐるがこの方が今の役に立つだけ高い。エペレストの報告や色々ありますが送料を拂つても日本の古本屋で買うのよりは安いのではないかと思ひます。今の英國では聞いておどかされてゐた程不自由はなく、ホテルではちゃんと毎日石鹸が乗つていて、タオルは二枚はついており一ペニーどころか半ペニーの銅貨が價值をもつてゐるのも嬉しいこととて、そんなに困つてゐる様子はない。耐乏といつても日本のように本當に生きるか死ぬかのスレスレになるのとは違ふようです。

(十月廿一日附松方三郎氏宛)

ポートランドにて

中屋健一

三田さんの友達、アルバート第二回目的登攀者たるエーレス教授(リード大學)の出迎えを受け、冷雨にも拘らずポートランドで愉

快な一日を送りました。マザ・クラブはポートランドの登山家、スキーヤー、ハイカーなどのクラブで、決してアメリカン・アルパイン・クラブのように片苦しいものではないようです。丁度水曜日の月例會に當り會員が多数集り愉快な一夜でした。横さんの話など大に面白く聞きたがり、こちらよりよく知つてゐるのに驚きました。話をきいてゐるとどこかに行きたいですが、忙しい旅なのでそれもないですね。十一月十五日マザ・クラブにて)

(會員中屋氏の渡米に際して三田幸夫氏からアルバートの第二登頂者オリーバー、エーレス兩氏に懇切な紹介狀が送られ、中屋氏が先づエーレス氏に心から迎へられた次第は右の便りの通りだが、これと前後して十一月十一日オリーバー氏から三田氏へ宛てられた便りによれば中屋氏の今後の活躍に會が期待する所少なからずなものでオリーバー氏の書簡を抄出する。)

三田幸夫様。貴友中屋氏が渡米される山嶺しく存じます。私は十二月紐育市で開催されるアメリカン・アルパイン・クラブのアニュアル・デイナリに中屋氏を招待したいと思ひます。だが同氏の滞在するスタンフォード大學と紐育市とは丁度反對側になつてゐるので同氏が折良く出席できるかどうか心配してゐます。私は亦私の友人でスタンフォード大學の近くに住むシェラクラブの會員に手紙をかきました。彼等は多分旅行中ですが歸つていたら中屋氏を近隣の

山地へ御案内することゝ存じます。

私の妹は今紐育におりますが喜んで中屋氏をアメリカン・アルパイン・クラブへ御案内することゝ思ひます。そこの大圖書室や博物館は定めし同氏の興をおこされるものと推察します。(後略)

入笠山便り 高橋達郎

夏山、秋山のシーズンが終り今は越冬の準備の薪作り毎日忙しい日を續けて居ります。

十一月十九日に本州を通過した不連続線が新雪をもつて来て約四寸程積り今年の新雪を作りました例年なれば十二月下旬にはスキー可能になります。今年も多分その頃となれば六七十程の積雪はある事と思ひます。

自然のよいスキー場なる入笠山を山スキーの練習場として發展させたいと思つて居ります。入笠山の稜線は一月の下旬頃にはウインドクラストしてスキーには不向きですが、新制高校部員のアイゼン技術、雪洞、イグルーなどの練習には良いと思ひます。西北の季節風が稜線にたへず吹いて居ります。

スキー場としては鐘打平及び大澤山の頂に附近が、一七〇〇米から一八五〇米の標高ですから極く軽い粉雪が降り、二月中旬頃は百二十三十程の積雪量があり気温は日中で零下十度位です。

小屋は小生が冬期も常住して居ります。あまり副食はありませんが、暖房設備は完備して居ります。新しい山スキー場として健全な發展のため皆様の御指導と御援

助とをお願いします。尙前もつて御連絡願へれば幸ひと存じます。(入笠小屋にて)

★小集會記錄★

第一二四回 八月十七日

講演(一)スケッチの話

講師 足立源一郎氏、山川勇一郎氏

(二)山の詩歌集

講師 池田彌三郎氏

第一二五回 九月廿一日

講演(一)山の寫眞の撮り方

講師 船越好文氏

(二)山の信仰と宗教

講師 折口信夫氏

報告 アンナ・ブルナ登攀

報告者 角田 明氏

第一二六回 十月十九日

講演(一)山の道具について

講師 海野治良氏

(二)山の資源開發について

講師 野口研究所工藤重長

第一二七回 十一月十六日

講演 スキー技術について

講師 西村一良氏

報告 谷川運平標に於ける

遭難

報告者 杉本義信氏・角田明氏

映画(一)ヘルマン・シュトイリ

ペーター・ガウフマン兩氏の

スキー技術 撮影田口二郎氏

(二)春の乗鞍スキー 汎日

本スキー技術研究會撮影

(三)サンモリッツの冬期オリ

ンピック大会一九四六年版

會務報告

十月 連絡理事會(四、十一、十八日) 月例役員會(二五日)

主なる事項 第五回國體登山・國體記念富士登山・高山深谷發行・立山及劍技術講習會・山岳第四五年發刊・名譽會員招待晚餐會・會費徵收方法の件等。

十一月 連絡理事會(八、十五日) 月例役員會(二九日)

主なる事項 十一月末現在會計報告・會費徵收方法として集金者派遣・ルームにストーブ設置・高山深谷・ルーム中二階改造の件・國體登山報告・平標山遭難檢討等。

「高山深谷」懸賞寫眞締切期日延期のお知らせ

會報第一五一號及「山と溪谷」「吾人」「人間」などで募集しました「高山深谷」第十一輯用懸賞寫眞募集期限は昭和廿五年十一月廿日でありましたが、各方面の希望もあり、地域的にも全國に亘つて收録したく、第十輯發行以來すでに十年を経過しましたことゝ、さらに廣く應募を得たく締切を昭和廿六年一月末日まで延期することとしましたから、新舊の別なくふるつて應募下さい。

北海道支部大會

會員坂江善治氏から北海道支部大會を九月下旬小樽近郊の赤岩山で催したと云ふ報告に接したが、右は會報前號の會員通信と重複するので割愛する。尙小樽山岳會ではこの大會を機に赤岩山の岩場の詳細を記した雑誌「赤岩山」を刊行し参加者に贈呈した。B5版26頁寫眞二葉地圖ルート圖多數挿入された良心的な作である(懸賞版刷)希望者は實費で入手できるから左

茗溪堂刊

昭和廿六年版 山日記 160 圓

赤布 クロス 装
ボ ケ ツ ト 型

登山のためのスキー術 270 圓

日本山岳會理事 林 和 夫 著

山 岳 第45年 豫價180圓

寫眞數葉 180 頁

北海道産高級スキー販賣

札幌芳賀製其の他・材質タモ
(アツシュ)・アサダ・イタヤ等

冬山用具・スキー用具一切販賣

優秀スキー靴・御用命賜ります

片 桐

東京都文京區湯島天神町三の十九

(湯島天神下電車通り)

電話 下谷 (83) 5701 (呼出中村)

記へ申込まれたい。(小樽市堺町並
澤倉庫内、山本昇八)

米人會員紹介

ウィリー・ミラー氏という米國の青年が十一月廿日付本會に入會した。氏はロサンゼルスに生れ本年廿三歳の青年であるが、現在は豊岡の米空軍に勤務している。三ヶ月前に沖繩から轉任して来たばかりだが山が好きなので日本の山の人達に接觸したいと思い、アメリカン・アルパイン・クラブに問合せた所日本にはJACがあるからそこに行けと云はれたのが本會を訪れる機縁になつたと云つてゐる。

ミラー氏はアメリカン・アルパイン・ジャーナル一九五〇年版とトレンカーの「マイネベルグ」及び古いスクラップ數葉をルームに寄贈されたが、トレンカーの本は在獨米軍に勤務する同氏の兄弟から送つて来たものだそうである。氏は山登りに澤山の経験はないがと謙遜しているが日本の山にも登り度いと思つて、アイゼンやピッケルを購入したからこれを使へる二日行程位の山は何處かと尋ねていた。近く會員の誰かが同伴して東京から近い冬山に出かける事になるであらう。(入澤)

會員計報

澤本辰雄氏(會員番號一一八一番
昭和五年五月入會)は病臥療養
中の處去る十一月逝去された。
氏は立教大學山岳部の出身であ
つた。
本會は謹みて哀悼の意を表する。

事務所から

★最近ルームへ集る會員の數も多くなり狹隘を感じるやうになりました。東京支部の階入りで近く二階を改裝し集會に不自由ないやうな案が出され一部資金は同支部が請負はれました。ついでに全國の會員諸氏、特に東京近隣の會員諸氏よりの募金を切におねがひ致します。一口百圓となつておりますが零細な資金を數多く集めたいものです。

★山岳第四五年は既に印刷所の手にまけつています。執筆者は山口二郎・高木正孝・中島正文・故木暮理太郎等の方々です。内容の詳細は次號で發表します。

★會員名簿も近く印刷に廻しますから、まだ豫約されたい方はこの際至急御申込下さる様重ねておねがひします。

★山日記が出来上りました。會員に限り一五〇圓(定價一六〇圓)でお頒けしますからルームか茗溪堂へ御申込下さい。他の店では割引では取扱いません。

昭和廿六年一月十五日

東京都千代田区神田駿河台島ノ六

発行所 社団法人 日本山岳會

編集者 望月達夫

電話(一九五九番) 日本体育協會
神田(二〇八八番) 日本体育協會
(三一二四番)

振替口座東京四八二九番

東京都港區赤坂溜池五番地

印刷所 株式會社 技報堂

スキーマがね

御處方通り迅速に調製致します



最良のレンズ、最新のフレーム

岩崎眼鏡店

銀座六丁目 松坂屋前(57-0319)

登山靴・スキー靴

御調製・修理

——多年専門にたたきあげた腕をお見せ致します——

山友社 高橋靴店

東京都新宿區三榮町3 電話四谷(35)1912